

Title	小野蘭山の随筆
Sub Title	OnoRanzan's notes on natural history: "Shûhōken zuihitsu", "Suikagyokinkōsho" and "Nanrō zuihitsu"
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (Hiyoshi review of natural science). No.34 (2003. 9) ,p.1- 7
JaLC DOI	
Abstract	天明8年(1788)1月30日, 京都は大火に見舞われ, 2月2日早朝に鎮火するまでに御所と1424町を焼きつくした。河原町にあった小野蘭山の衆芳軒も焼け落ち, 蘭山は門人吉田立仙の家に身を寄せた。幸いにも難を免れた吉田家は三十三間堂に近い鞆屋町にあった。彼はしばらくこの家に厄介になるが, 弟子たちも離散して講義もできず, 久々に得た小閑に筆を取って『衆芳軒随筆』『水火魚禽考諸』『南楼随筆』を残した。各項末の日付をみると, この順序で3書をしたためたらしい。もともと, 形を整えたのは最後の1書だけで, 他の2点は草稿のまま残されたようであるが, 新出史料の『衆芳軒随筆』を含めて3点とも未紹介と思うので, ここで概要を述べておきたい。なお, 本報の記述や引用はすべて自筆原本による。
Notes	原著論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20030930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小野蘭山の随筆

磯野直秀[†]

ONO Ranzan's Notes on Natural History: "Shūhōken Zuihitsu",
"Suikagyokinkōsho" and "Nanrō Zuihitsu"

Naohide ISONO

天明8年(1788)1月30日、京都は大火に見舞われ、2月2日早朝に鎮火するまでに御所と1424町を焼きつくした。河原町にあった小野蘭山の衆芳軒も焼け落ち、蘭山は門人吉田立仙の家に身を寄せた(注1)。幸いにも難を免れた吉田家は三十三間堂に近い鞆屋町にあった。彼はしばらくこの家に厄介になるが、弟子たちも離散して講義もできず、久々に得た少閑に筆を取って『衆芳軒随筆』『水火魚禽考書』『南楼随筆』を残した。各項末の日付をみると、この順序で3書をしたためたらしい。もっとも、形を整えたのは最後の1書だけで、他の2点は草稿のまま残されたようであるが、新出資料の『衆芳軒随筆』を含めて3点とも未紹介と思うので、ここで概要を述べておきたい。なお、本報の記述や引用はすべて自筆原本による。

1 『衆芳軒随筆』

小野蘭山のご子孫に当たられる小野強氏は、小野家に伝わる蘭山と孫職孝の資料類を先般すべて国会図書館に寄贈された(注2)。そのなかに『水火魚禽考書』の写本があったが、それに『衆芳軒随筆』(W391-N28[1])と題する蘭山の自筆原稿が綴じずに挟まれていた。まったく名も知られていない新出資料なので、ここに概略を記し、うち重要と思われる2項目について述べておきたい。

この『衆芳軒随筆』は8丁から成り、冒頭に蘭山の自筆で「衆芳軒随筆」と記し、次の6件が続く。序・跋などは無い。以下に、6件の題名と、各項末の年月日を記しておく。「朽匏子^{きゅうぼうし}」は蘭山の号、「:」以下は磯野の注記である。

[†] 〒232-0066 横浜市南区六ツ川3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received, Mar. 8, 2003]

●本稿では、引用文の漢字と仮名に現行字体を用い、濁点・句読点・振仮名を適宜加えた。引用文中の()は原注、< >は原本の振仮名、□は判読できなかった字、【 】は脱字・送り仮名の補足、[]は磯野による注あるいは補足である。仮名が続くとき、単語に下線を付して読みやすくした場合もある。

鶉ノ鳥, 「天明戊申 [8年] 冬十一月十日識」: ライチョウ

千歳薬, 「十一月十六日識」: アマカツラ

側金盞花, 「十一月十九日識」: フクジュソウ

証類本草, 「十一月廿六日」: 『証類本草』よりも, 『本草綱目』の特色の指摘

岐穂車前子, 「同日」: オオバコ

無題, 「時十一月廿六日 蘭山識」: 天明8年京都大火後の動静

稿末: 「天明戊申之冬 朽匏子」

日付は天明8年11月10日から26日に及ぶ。このうち、蘭山に関連する2件を紹介する。

●鶉ノ鳥

「鶉ノ鳥 加賀ノ白山, 越中ノ立山及ビ飛驒ノ乗鞍嶽ニ, ライノトリト云アリ。……ライノ鳥, 今白山ノ人ハレイテウ [靈鳥]ト呼ブ (頭注: 其トリノ鳴声ニ因テ, 山人ライノ鳥ト名クト)。世上ニ伝フル所ノ画, ソノ形状着色一様ナラズ。ソノ中, 鶉 (イエバト) ヨリ微大ニシテ雄ナル者ハ, ソノ色浅黒, 目上ニ小紅冠アリ。翅白白色, 尾黒色, 腹ハ白色ニシテ小黑斑アリ。足ハ微黒色, 或曰微青色, 脛ニ白毛多クシテ, 他鳥ニ異ナリ。雌ナル者ハ色斑, 雌雄ノ如クニシテ白羽根ヲ雑ユ。大抵, 此如ク画ケルモノヲ真トス。

輜軒小録ニ, 甚ソノ子ヲ愛ス。白山絶頂ヨリ下廿町許ニ五葉ト云坂アリ, 万松環リ囲ムコト数十回, コノ鳥ソノ間ニ棲宿シ, 曾テ他所ヘ行ズト云 [引用, ここまで: 注3]。

余, 嘗テ白立ノ兩岳ニ遊シ, 北人ニ尋ルニ, 実ニ五葉松下ニ棲ミ, ソノ実ヲ食フト云。後鳥羽帝ノ御製ニモ, 白山ノ松ノ木影ニカクロヒテ安ラニ栖ル来ノ鳥カナ, トアリ。……北人ノ云ク, 山ニカスミカカレバ必コノ鳥多ク出テ往来シ, 人ヲ畏レズ, キウキウト鳴ク。凡ソ山ニカスミカカレバ前後見ヘガタキユヘ参詣ノ人々, 急ギ山ヲ下ル故, 山人此鳥ノ出ルヲ御迎出ルト云ト。コノ説ニ拠レバ, 鳴声ヲ以テライト名クルニモ非ズ。近年浪華木村生 [木村蒹葭堂] 白山ノ雌鳥ノ乾腊一隻ヲ得タリ。コレヲ諦視スルニ首ヨリ尾ニ至ルマデ長一尺四寸許, ソノ形状前ニ言トコロニ彷彿タリ。只, 兩ノカザキリ長ク, 尾モ長クシテ燕尾ノ如シ。ソノ足五指ニシテ甚ダ鼠脚ニ類ス。……

天明戊申 [8年=1788] 冬十一月十日識」

上記の「乾腊」はライチョウらしくない。また, 「……類ス」の後は漢名の検討だが, 結局特定できていない。この文で注目されるのは, 『輜軒小録』の引用に続く「余, 嘗テ白立ノ兩岳ニ遊シ……」の個所で, 蘭山が若い頃に白山・立山の両山に登ったとわかる。これは従来知られていなかった事実である。蘭山は若いとき身体が弱かったとされてきた (次に述べる『水火魚禽考書』で, 自分でもそう語っている) ので, 採薬などは京都近辺に限られていたであろうとされてきたが, 少なくとも一度は北国を訪れていたのである。

●京都大火の件

最後の1丁は大火後の暮しに当てられており, 内容から跋文に相当する。だが, それまでの5件が一応清書されていると思われるのに対し, これは走り書的な細字での訂正・加筆が夥しく, 私の力ではとても読み解けない。拾い読みのにまとめると, 天明8年1月の京都大火で蘭

山も家を失い、城南の吉田生（吉田立仙）の家にある2楼のうち西側の棟に住まうに至ったこと、そこは鴨川の近くで、背後には方広寺の大仏堂（その後、焼失）があり、東山の寺社が眺められることなどを記し、弟子たちも罹災し離散してしまったので講義も出来ず、思いがけず少閑を得て筆をとったと述べている。この項の終わり近くに、「嘗管窺之陋説，漫隨所見而筆之，名曰南楼随筆，將以示兒輩……」と記しているので、このとき執筆した諸文を「南楼随筆」の名でまとめようとしたことがわかる。「南楼」は京都の城南にある仮の住まいを指すと思われる。

この文の最後には「時十一月廿六日」とあり、続いて行を変えて「天明戊申〔8年=1788〕之冬 朽匏子」と記す。「朽匏子」は蘭山の別号。

2 『水火魚禽考書』

本書は、自筆原本（三Ja ろー80，1冊）が東洋文庫に、転写本（W391—N28〔2〕，1冊）が国会図書館に所蔵されている。後者は子孫が大正中期頃に写したものらしく、仮名の送り方などが原本と多少異なる。

全25丁。序・跋・目録は無く、いきなり本文に入るが、内題は記されていない。本書の題は題箋だけにあるのだが、「水火魚禽考書」のうち、「魚禽」の語句はどうみても内容にそぐわないので、この書名は蘭山の付けたものではないと思う。

本文は18項目から成り、大きく2つに分けられる。第1は最初の10項目で、「金粟」「煤炭」などの漢名について漢書を抜き書きしたもの。大半が1～数行程度で重要なものではなく、ここでは取り上げない。

第2は続く8項目で、すべて片仮名交りの和文。図は無い。以下に題と末尾の日付（3件のみ）を記す。「：」以下は磯野の注記。

薬石：『延喜式』所載の鉱物産地

薬石，「十一月廿六日」：『日本書紀』『古事記』『延喜式』所載の鉱物産地，後半は前項と重複

茶磨石，「十一月廿六日」：勾玉などの冷滑石製古器物

花実変生，「同日」：植物の開花・結実について，通常とは異なる繁殖法の事例

金絲桃：ヒヨウヤナギなど

六条煮ほか：各種食品の作り方

獣炭法ほか：日常生活に役立つ各種の工夫

広大本草：同書の語句約130の抜き書

このうち、2番目の「薬石」では、最後に蘭山の随筆的長文が付随する。蘭山の嘆きを伝える珍しい一文なので、以下に示しておく。

●「コレ、今見聞スルトコロノ大略ナリ。コレニ因テ思ヘバ、国々ニ志アル人アリテ尋求メバ、石薬ニ限ラズ、凡百ノ薬物モ蛮華ノ舶来ヲ待ズシテ、本邦産スル所ノ品ニテ足ル様ニモナルベシ。惟、ソノ人ノ乏シキヲ歎ズベキコトナリ。余、壮年ヨリ本草ノ学ヲ教授ス。今ニ至ルマデ、

四方之士、吾ガ門ニ遊ブモノ多カラズト為ズ〔=少ナカラズ〕。然レドモ帰国ノ後、相續テ学習スルモノ、僅ニ什ノ一（=十分ノ一）ニ及バズ。皆言フ、帰後友ナクシテ果サズト。是皆世ニ阿リ、利ヲ貪ルノ輩ニシテ、其志ナキノ甚シキ、固ヨリ責ルニタラザルモノナリ。夫レ志アルモノハ、親シク天下ヲ周遊シ、極西ノ国ヨリ蝦夷ニ独歩スルモノモアリ。豈ニ友ノ有無ヲ論ゼンヤ。凡ソ、今ノ人、善ニ与スルモノ少シ。故ニ古語ニモ志道友少、又水清無魚、人清無友ト云ヘリ。

余、幼ヨリ多病ニシテ門ヲ出ズ。故ニ竹馬ノ友ナシ。長ジテ松岡先生ノ席ニ連ルコト数年、ソノ徒百有余人ナレドモ、一ノ親友ナシ。今衰老ニ及テモ亦然リ。故ニ、ソノ見聞スルトコロ極メテ寡陋ニシテ、先生万分ノ一ヲ窺フコトアタハズト雖ドモ、懇請ニヨリテ僭シテ教授ヲナス。今帰郷ノ学生、モシ志アリテソノ国々ノ山野河海ヲ跋涉シテ薬物ヲ尋求メ、其真偽ヲ弁識シ、ソノ国ニ何等ノ真ノ薬品アルコトヲ明ニシ、外舶ヲタノマズンバ、コレモ亦五金ノ外、ソノ国ノ宝ト云ベシ。コレヲ用テ蒼生ヲ寿域ニ躋サバ〔人々を幸せにすれば〕、亦民ノ父母タル人ニハ忠行ノ一事トモナルベシ。昔ヨリ京師浪華ノ薬舗ニハ、品ノ悪シキ薬物ヲ田舎下シト称シ貯ヘ置ク時ハ、ソノ国々へ運送スル薬ニハ不正ノ品モ多カルベシ。ソノ国々ニ正シキ薬物アルヲ知ラズシテ、外舶不正ノ薬ヲ貴ビ用テ民命ヲアヤマルモノハ、誠ニ頑愚ノ為ザナルカナ。薬ヲ正シ、真偽ヲ弁ズル者ハ医家ノ急務ナリ。猶、工人ノソノ器ヲ利スルガ如シ。而シテ今ノ人、ソノ好ム所ニ於テハ、友ヲ問ハズシテ自【ラ】走り、ソノ急務ニ於テハ、反ニ或【ハ】友ナシト言ヒ、或ハ閑ヲ得ズト言、肯テ学バザルモノ多シ。誠ニ顔厚ノ至リト云ベシ。

十一月廿六日識]

3 『南楼随筆』

本書は、自筆原本（三Ja ろー25, 1冊）が東洋文庫に、転写本（W391—N25, 1冊）が国会図書館に所蔵されている。前節の『水火魚禽考書』と同じく、写本は仮名の送り方などが原本と多少異なる。

本書は全33丁で、大きく2部に分かれる。第1は禽虫などの漢名の説明を漢書から抜き書きした11項。大半が1～2行程度で、参考になる資料とは言えない。

第2が主要部であり、内題は「南楼随筆」、氏名は記さない。序・跋・目録は無い。稿末に「文化戊辰〔5年=1822〕之秋」と記すが、これは最終項を追記した年月かと思われる。

この「南楼随筆」は動植物など計18件（動物8品、植物8品、ほか2件）の小論を集めたもので、大半は半丁～2丁。図は無い。次にすべての題と末尾の日付（無い場合もある）を、配列順に挙げておく。最後の1件は漢文だが、その他は片仮名交りの和文。図は無い。「:」以下は磯野の注記、*を付したものは後段で原文を再録する。

青精, 「十一月廿八日」: サカキ

スケトウ: スケトウダラ

車前葉山慈姑, 「二十九日」: カタクリ

昨葉何艸考証, 「十二月三日」: 昨葉何艸=ツメレンゲ

ウキキ*, 「十二月六日」: マンボウ
 ハタハタ
 黄穢魚: アマダイ
 綿棗兒, 「十二月十一日」: ツルボ (ユリ科)
 ウミヘチマ*: 海綿
 シハヒトデ*: テヅルモヅル
 海胆*: ウニ
 沙噴*: タワラゴ=干ナマコ
 猪殃々: クルماغサ, ムグラ
 夏ハゼの木: ナツハゼ, 山ナスビなど
 楸梓, 「十二月廿二日」: アズサの木
 倒影*, 「廿五日」: ピンホール現象
 モミジ, 「廿五日」: 紅葉について
 的里亜加: 薬品テリアカのこと
 稿末, 「文化戊辰之秋」

項末の日付は、11月28日から順次12月下旬に及ぶ。前述のように、『衆芳軒随筆』と『水火魚禽考書』の項末にも同じ形式で11月10日から11月26日までの日付が記されており、それに引き続いて執筆されたと思われる。『衆芳軒随筆』のところで記したが、『南楼随筆』の書名は天明8年(1788)の段階ですでに予定されていた。

以下、幾つかの項目について、主要な記述を引用する。

●「ウキキ ウキキハ奥州常州ノ海ニ産シテ、大ナルモノハ長サー二丈、小ナルモノ五六尺、性最鈍ナリ。ソノ海上ニ浮ベルモノヲ、漁人陸ヨリ綱ヲカケテ引ヨセ、刀ヲ以テ肉ヲ切り取ルニ動カズ。又、ソノキズモ亦久カラズシテ愈【=癒】ト云伝ヘリ。余、水戸ノ人桑名生某等数人ニ訪【尋?】ニ曰ク、海辺ノ漁人ハ皆マンボウト呼ビ、城市ニテハウキキト呼ブト。……世ニウキキザメノ称アリ。ソノ長サハ潤サヨリハ微シ長シ。尾ノ方ハ微シ広クシテ、簸箕[=箕]ノ形ノ如シ。目ハ白ク、口ハ小クシテ、齒ハ河豚ノ如シ。舌ハ円ニシテ尖ル。左右ニ小鰭アリ、形鯊翅ノ如シ。ソノ旁ニ各一竅アリテ潮ヲ噴ク。背ト腹下ト尾ニ近シテ長鬣各一アリ。尾ハ広クシテ甚短ク、肉アリテ鼈裾 [スッポンの甲羅周辺の柔らかな肉]ニ類ス。ソノ末ハ大ナル出入アリテ、菊花辺ノ如シ。甚、他魚ノ尾ニ異ナリ。春夏多ク出、故ニ春時献上アリ。秋分ノ比、六尺許ノ大サナルモノ多ク浮ブ。冬ハ少シ。ソノ性、好テ海面ニ浮ビ睡ル。漁人、ソノ海上ニ睡ルヲ見テ、モリヲ以テツキ殺シ、両舟ヲ以テ魚ヲ挟ミ、水ヲ泳リテ魚ヲ両舟ニツナギツケ、舟ヲ以テウケ [浮キ]トシ、使魚不得沈 [魚ヲシテ沈ミ得ズセシム]、魚上ニノボリテ肉ヲ切り去リテ腸ヲトル。又カギヲカケテ岸ヘ引寄ス。又漁人海面ニ浮ヲ見テ舟ヲ寄スル時、タマタマ魚、海底ニ沈ムコトアリ。預 [アラカジメ] 舟中ニ台笠ヲ多貯ヲキ、コレヲ海中ニ投レバ、我友ト思ヒ再浮テ睡ル……此魚本邦古書ニ查魚ト云。漢名未詳……

此魚元来東国ノ産ニシテ、奥常〔奥州常州〕ノ外ニハ産セザルノ語、大和本草ニモ載タリ。然ルニ近年ハ西北諸州ヨリモ往々出テ、各ソノ方言アリ。然レドモ皆ソノウキキナルコトヲ知ラズ。只ソノ形ノ異ナルヲアヤシミテ図シテ送レリ。余前ニ土州羽根浦、野村生某ニコレウキキナルコトヲ示シ、且ソノ腸ヲ取試セシムルニ、果シテ東国ヨリ来ルモノニ異ナラザリシト云フ。今ソノ方言等ヲ左ニ記ス。

ウキキヲクルサメト呼国モアリ。加州ニハ雪ザメ、或ハイニギサメト呼。豊後佐伯ニハババラボウト云。周防通津浦、江尻浜ニハ、アバラボウト云。越州ニハ雪ナメト云。播州網干ニハイササメト云。丹後ニハフナワニト云。若狭ニハ雪ウヲト云。越前敦賀ニハ万歳ウヲト云。必ニ枚ヅツ出。同国ノ漁人ハグニヤト云。肉柔ナル故ナヅク。豊前恒見浦ニハ、ハバラ坊トモ、タカラボウトモ云。

宝暦十二年〔1762〕春、丹後ニテ捕ルモノ、長五尺七寸五分、濶三尺。上下ノ鬣各二尺二寸。
〔濶＝広さ＝幅、上鬣＝背鰭、下鬣＝臀鰭〕

安永四未年〔1775〕四月廿五日、摂州兵庫ニテ捕ルモノ、長一丈、濶七尺五寸、上鬣末ヨリ下鬣末ニ至マデー丈二尺、厚三尺五寸許。

同七戌年春、土州安喜郡田野浦ニテ獲ルモノ、長四尺八寸、濶三尺五寸、鬣二尺。

同八年亥十二月、越前敦賀ニテ獲ルモノ、長八尺、濶五尺、上鬣三尺、下鬣二尺五寸。

同冬、若州小浜ニテ獲ルモノ、長九尺余、濶五尺許、厚一尺許、鬣各三尺余、目三寸許、口七寸許。

同九子年、播州網干浦ニテ獲ルモノ、長六尺、濶四尺。〔この後に「十二月六日識」

天明四年〔1784〕辰三月廿八日、豊前恒見浦ニテ獲者、長五尺七寸、濶一尺六寸、^(ママ) 鱗一尺二寸。総身如骨、堅クシテ石ニ似リ。先年子祝浦ニテモ獵之……〕

じつに長い文で、形態・方言・捕獲例などを詳述しており、蘭山がマンボウに並々ならぬ関心を寄せていたことがわかる。奇魚なので各地から多くの捕獲例が伝わる（注4）が、上述の7件はいずれも計測値を添え、貴重である。なお、マンボウは『本草綱目啓蒙』には所収されていない。

マンボウに深い関心を示した博物家に幕医栗本丹洲がおり、^{マンボウ} 『翻車考』（文政8年〔1825〕6月成）の著作がある。参考のために、これに載っている方言を示しておく——^{ウキキザメ} 浮木鯊（奥州磐井郡、^{シヲリカ} 志於里加（北国）、^{マンボウザメ} 万宝鯊（仙台）、^{オキマンザイ} 澳万歳（佐州）、^{キナボ} 万歳楽（相州）、^{キナボ} 岐奈房（松前）、^{シキリ} 止吉利（薩州）。このうち、キナボはアイヌ語らしい（注5）。

●「ウミヘチマ 勢州二見ニハカホチト云。越前敦賀ニハ、水スイト云。九州ニハイソザワラ、又イソザウラトモ云。ザウラハ繩ヲツクネテ〔丸メテ〕物ヲ洗フモノナリ。サワラトモ云（注6）。海ワタト云。加賀金沢ニテハ、シミセント云。薩州ニハ、コノズケタル〔碎ケタル〕ヲ波ノ花ト云。毬中ニ入レ、ナカ入トス。ヨリハズミ〔弾ミ〕、高ク上ルナリ。蜜産ノ^(ママ)スボンスハ厚サ寸許。柔ニシテ綿ノ如シ……〕

江戸時代の本草書・博物書には海綿の記事が乏しいが、17世紀初頭に宣教師が刊行した『日葡辞書』（注7）には「ハマザワラ」の語が挙げられている。

図が無いので断定はできないが、ウミヘチマは現和名トンビノハカマのような海綿と思う。海ワタなどと呼ぶ場合は、イソカイメン類なども含めた名に思える。いずれにしても、これらの海綿を物を洗う道具に使うのは自然なことだっただろう。なお、『本草綱目啓蒙』には海綿の記事が無い。[追記参照]

●「シハヒトデ 紀州ニテシハシトデト云、又松ダコト云。阿州ニテシワト云。予州松山ニテデンパチト云、又ガラコト云。讃州ニテノヅカミト云、淡州ニテシヤグマト云。又テンバト云。兵庫ニテモテンバト云。兵庫ニテハ又テンツクモンツクトモ云、又テヅルモヅルトモ云。肥州五嶋ニテツナツカミト云、又肥前ニテホネツギト云。筑前モ同。……赤白二種アリ（紀州）」

肝心の形状の説明を欠くが、棘皮動物クモヒトデ類のテヅルモヅルに間違いはない。『本草綱目啓蒙』の該当箇所（海燕の項）には上記の方言すべてが含まれているほか、ノウツカミ、ナルカシラ（房州）、バンシヤガヒ（尾州）が加わっている。

●「海胆 ウニ。奥ノ仙台ニテガゼト云、三河ニテカゼト云。備前丹ノ宮津ニテイガト云。播ノ姫路ニテヲコゼノクハNST云、土ノ羽根浦ニテドモリクハNST云。筑前ニテ褐刺ノ者ヲムマクソガゼト云。奥ノ松前ニテ黄細刺ノ者ヲカゼト云、黒粗刺ノモノヲノナト云。製物、仙台ノウニヲ名品トス。潤サー一寸許、長六七寸許ニ円カニ、カタメタルモノナリ。色黒ヲ上トス、黄色ヲ中トシ、赤色ヲ帯ヲ下トス」

この項から、ウニ類に対してヲコゼノクハNST、ドモリクハNST（クハNST=鍾子=茶釜の類）、ムマクソガゼ、ノナなどの名称があったことがわかるが、現在の種名には継承されていない。上名のうちムマクソガゼはいまのアカウニらしく、松前のカゼはエゾバフンウニ、同ノナはキタムラサキウニか。『本草綱目啓蒙』では現在のカシパンなどの不正形ウニ類は海燕の項に取り上げているが、正形類ウニが欠けている。本項はそれを補う意味がある。

●「沙嘆 阿波備前ニテ正月二日売初ニタワラゴト呼、二枚ヲ一石ト為、神架ニ上置テ十四日ノ膾トス。雲州、防ノ黒川ニテモタワラゴト云。雲州ニハタワラトノミモ云、フクダハラトモ云。肥【前】島原ニモ方言タワラト云。……」

ナマコを干したものの名称の集録で、俵に詰めて出荷するので、タワラゴなどの名があるのだろう。この項では生品に触れない。

●「倒影 京師大宮通九条上ル東涯、東寺塔ノ前ニ当ル人家、未甲ノ時、戸ヲ閉シ、ソノ隙光ノ射ルトコロニ板或ハ席ヲ立ツレバ、塔及松樹ノ影、皆倒ニ現ズ。人々怪シミテ観ルモノ多シ。余モ亦、嘗テ往テコレヲ見ル。唐山ニモコノ事アリ。……凡ソ隙光ノ映ズルトコロ、影皆倒ナリ。故ニ庖室ノ天窗上、鳥鳶ノ類飛過ルトキハ窓内ノ影、必反走ス。鳥北ニ行クトキハ影南ニ走ル。行雲ノ影モ亦然リ。怪ムニ足ルベカラザルコトナリ」

いわゆるピンホール現象で、ちょっと前までは朝目覚めると、雨戸の小孔を通った光が障子に木立などの倒立像を作っているのによく気付いたものだった。雨戸も障子も縁遠くなった今は、この現象も身辺から消えてしまった……。

●稿末の年記について

『南楼随筆』の最終項「的里亜加」とその末尾にある年記「文化戊辰〔5年=1808〕之秋」

の筆跡は蘭山のものだが、それ以前の部分と筆の太さと筆勢が異なる。前述したように、本文は天明8年(1788)に執筆されていたと考えられるので、文化5年に「的里亜加」の項を加え、年記を添え、1冊にまとめたのではないか。しかし、天明8年に同時に執筆された『衆芳軒隨筆』や『水火魚禽考書』を、蘭山は含めなかった。その理由はわからない。

- (注1) 平井宗七郎, 蘭山小野先生小伝, 文化10年記: 『本草綱目啓蒙』第4巻(東洋文庫, 平凡社, 1992年)に所収。
- (注2) 国会図書館に寄贈された小野蘭山関係資料の目録, 愨齋研究会だより, 94号, 2~7, 2001年。なお, 小野家蔵書の大半は数十年前に岩崎文庫に入り, いまは東洋文庫が所蔵している。
- (注3) 伊藤東涯, 『輜軒小録』, 『日本隨筆大成』, II期24巻, 吉川弘文館, 1975年。
- (注4) 磯野直秀, 日本博物学史覚え書 XII, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 31号, 31~51, 2002年。この報文中の「幕末までの珍鳥奇魚捕獲記録」に管見に入った事例を年表として示したが, そのうちマンボウが12回を占める。これに『南楼隨筆』の事例を含め, 新出の8件を追加する必要があるので, 計20回の記録が得られていることになる。
- (注5) 渋沢敬三著『日本魚名集覧』(日本常民生活資料叢書, 第3巻, 三一書房, 1973年)に集録されているマンボウの現存方言は, ウキキ, クイザメ, シキリ, シチャー, バラバア, マンプ, ユキナメで, 江戸時代のウキキとシキリは生き残っている。また, バラバアとユキナメは『南楼隨筆』のバラバアとユキザメから転じたものであろう。
- (注6) 『時代別国語大辞典・室町時代編』(三省堂, 1985~2001年)の「さわら」の項では「竹を細かく裂いて束ねたもの」と説明する。
- (注7) 土井忠生ほか編訳, 『邦訳日葡辞書』, 岩波書店, 1980年。森田武編, 『邦訳日葡辞書索引』, 岩波書店, 1989年。本誌本号の拙著『『日葡辞書』の動物名』参照。
- [追記] 幕末~明治初期に伊藤圭介が編集した資料集『植物図説雑纂』(国会図書館, 別6-9, 254冊)の冊125にある「ウミヘチマ」の項には, 以下の記述がある——「ウミヘチマ, カボチャ, シホスズ尾州知多郡, ソブ阿州, ヘチマ志州, トビノハバキ」(出典は水谷豊文『本草綱目紀聞』か), 「スpons [スポンジ], ウミワタ, ウミヘチマ, カボチャ。形チサボテンニ似テ, 糸瓜ノ如ク^{ヘチマ}……」(岩崎灌園『綱救外編』), 「スponsジウス, ウミヘチマ, イソサウラ(広島ニテ切ワラニ代用ス。サウラハ切ワラノコト也), シユミセン加州, ヲキノボリ相州小田原, ミヅスイ尾州, ウミワタ」(伊藤圭介記)。「ウミヘチマ」「サウラ」の語が幕末には健在だったこと, 蘭山が記した「カホチ」は「カボチャ」の転らしいこと, 現在のトンビノハカマに通じる「トビノハバキ」[鳶^{スネアテ}ノ脛当の意]の方言があったことなどがわかる。